

〔報 告〕

周産期における夫の父親役割獲得プロセス

木越 郁恵¹⁾ 泊 祐子²⁾

要 旨

周産期における夫の感情を理解し、夫が父性意識をどのように発達させて父親役割を獲得するのかを明らかにした。研究方法は、両親学級を受講し、研究への参加に同意した初産の夫婦3組を対象に、インタビューと参加観察を用いた。インタビューは、妊娠期から分娩および産後に渡って実施した。参加観察は両親学級および分娩時に実施した。データの分析は質的帰納法を用いた。

その結果、得られた発言から7つの上位カテゴリが抽出された。周産期における夫の父親役割獲得プロセスは、【妻への気遣い】を根底として【父親としての気持ちの出発】【夫婦としての体験共有】【父親像の形成】【父親像の行動化】【父母の相違を認める】【父親役割行動の具体化】という6つの段階をたどった。【父親役割行動の具体化】はプロセスの最終段階であり、育児期としてのスタートに位置した。今後も子どもの継続する育児によって、父親役割行動は様々に変化・発達すると考えられる。

本研究で明らかとなった父親役割獲得プロセスは父親となる夫の準備状態をアセスメントするのに有効になると考える。

キーワード：周産期、父親役割獲得、父親像

I. はじめに

妻の妊娠・分娩が男性にとって間接的な体験であるため、父親という新しい役割に適応する過程は女性の場合よりも困難であり¹⁾、それを補う試みとして、夫婦間で共に妊娠・出産・育児について考えるための両親学級やパパ・ママ学級が盛んに行われている。一方で、父親に焦点を当て、胎児画像を用いて胎児への関心を高める試みが行われている²⁾³⁾。夫婦が初めて親となり育児を協働して行えるためには、夫を妊婦の支援者としての側面のみからではなく、夫が父親役割取得するプロセスに注目し、父親への支援の方略を検討する重要性が示唆される。

II. 研究目的

周産期における夫の感情を理解し、夫がどのように父性意識を発達させ、父親役割を獲得していくのかを明らかにする。

III. 用語の定義

・父親役割：子どもの養育における父親としての一定の責務

IV. 研究方法

1. 研究参加者の選定

対象病院開催の両親学級を受講し、平成15年7、8月に出産予定者の中から、研究への説明し同意の

¹⁾特定医療法人社団御上会野洲病院

²⁾岐阜県立看護大学

得られた初産である夫婦3組である。3組とも不妊治療の経験はなかった。

2. データ収集と分析および信頼性の確保

データ収集は参加観察とインタビューを用いた。参加観察は観察後に場面を逐次記録した。インタビュー内容は、下記の項目について夫自身の意識や感情を、妻には夫はどのように思っているか、意識していると思うかを尋ねた。

妊娠期：妊娠判明、つわり、腹部増大について、胎動、児の心音・超音波像、現在の気持ち、生活の変化、分娩に向けての取り組み

分娩期：夫立ち会い分娩、両親学級

産後：現在の生活、両親学級

参加観察は、両親学級でのエクササイズの様子や産科受診時、分娩期、産後の夫婦の様子を観察し、夫の行動や言動に注目しメモし、その内容の意味を後の面接で確認することもあった。

インタビュー内容を逐語録に興し、参加観察は反応や態度を言語化しデータとした。データ分析は質的帰納法を用いた。文章の意味のまとまり毎に区切り、幾度も読み意味の抽象度を上げラベルを附した。分析は2人の研究者で行い、本研究と関わらない看護研究者にデータと分析を提示し確認してもらった。

3. 面接場所は、調査病院の使用の許可を得た会議室や産科病棟のブースなどの研究参加者が了解した場所で行った。

4. 研究期間：平成15年6月～9月

5. 倫理的配慮

施設長に許可を得て、研究参加者の選定は病棟看護師長に依頼した。研究への参加は研究者自身が研究趣意（目的・方法・プライバシーの保護・秘密の厳守、研究参加への自由意思、拒否しても不利益がないこと、結果の公表等）を書面と口頭で説明し同意を得た。インタビュー時の録音は研究参加者の許可を得て行った。録音テープおよびデータは厳重に管理し、関係者以外の目に触れないようにした。録音テープは研究終了時に破棄した。

表1. カテゴリー一覧

上位カテゴリ	カテゴリ
父親としての気持ちの出発	・妻の妊娠に対する喜び ・無事に出産する願い
夫婦としての体験共有	・妻主導による妊娠分娩への理解の促進 ・出産準備を夫婦で楽しむ ・胎児を五感で感じる
父親像の形成	・父親としての責任感の向上 ・継続する育児への構え
父親像の行動化	・出産への立ち会い ・妻への身体的精神的サポート
父母の違いを認める	・体感できない自己の限界 ・妻の母親役割を認める ・自分の父親役割を認める
父親役割行動の具体化	・無事の誕生に安堵 ・父親としての実感 ・育児への積極性
妻への気遣い	・妻への気遣い

V. 研究結果

1. 対象の特性、インタビューの回数と時期

夫の平均年齢33.3歳であり、妻は平均31歳であった。インタビューは、妊娠期に2事例は妻に2回、夫に1回、1事例は妻に1回であった。産後は2事例では、妻に1回、夫1回、1事例は夫に2回であった。分娩期に参加観察できたのは2事例であった。

2. 妊娠・分娩・産後における夫の感情と行動

データ分析により、【父親としての気持ちの出発】【夫婦としての体験共有】【父親像の形成】【父親像の行動化】【父母の相違を認める】【父親役割行動の具体化】【妻への気遣い】の7つの上位カテゴリに、16カテゴリが抽出された。カテゴリのレベルを高い順に【・】、〈 〉と示す。表1にカテゴリの一覧を示した。カテゴリ毎にその内容について説明をする。

1) 【父親としての気持ちの出発】

【父親としての気持ちの出発】は、夫が〈妻の妊娠に対する喜び〉や〈無事に出産する願い〉から父親としての気持ちを出発させていることである。

〈妻の妊娠に対する喜び〉は夫が妻に胎児が宿ったことに喜びを表現したものである。

・うれしかったですけど、ちょっとびっくりというように、素直に良かったなっていう感じです。待ってたんで。

〈無事に出産する願い〉は、夫が胎児の元気な出産を願った表現や行動を指す。

・買い物とか、子どもの物とかもちゃんとやってくれはるんで。すごい楽しそうに見てはります。

・パパママレッスンとか行ったりしてね。僕自身が結構興味持つ方なんで。

2) 【夫婦としての体験共有】

【夫婦としての体験共有】は〈妻主導による妊娠・分娩への理解の促進〉、〈出産準備を夫婦で楽しむ〉、〈胎児を五感で感じる〉で構成され、夫婦で胎児の成長や育児への準備を共に行っていることである。

〈妻主導による妊娠・分娩への理解の促進〉は、妻の誘いからであるが、夫が両親学級に参加し、妊娠・分娩に対する理解を促進していることを示す。

・(病院の両親学級に)言うてもうて良かった。誘ってもらわへんかったら、自分からは行こうとは言わへんから。

・これ(妊婦体験ジャケット)をつけてみて、大変さが分かるよって言うてはりましたけど。

・今日来て立ち会いとか大事ななって思いました。

〈出産準備を夫婦で楽しむ〉は、夫は出産・育児に向けて妻と一緒に用意を楽しんでいる様子を指す。

・買い物とか、子どもの物とかもちゃんとやってくれはるんで。すごい楽しそうに見てはります。

・ベビーバス見に行って、いっぱい並べて、どれが入れやすいかってやってはるねん。

〈胎児を五感で感じる〉は、夫が妻の腹部増大や超音波映像を見ることなどで、胎児の存在を感じることである。

・日に日に大きくなったなあって、毎日言ってくれますけど。

・ここら辺がよく動くから触ってみとか言って。あ、なんや動いたとか言って喜んでます。

・「ママ聞こえる」というグッズが売ってるんで

すけど。あれを買って一生懸命聞いてますけど。

3) 【父親像の形成】

【父親像の形成】は、夫が〈父親としての責任感の向上〉することを通して、自分が父親になることを意識し始め、さらに両親学級への参加などで〈継続する育児への構え〉をすることにより、自分自身の父親像が形成されることである。

〈父親としての責任感の向上〉は、夫が仕事においても日常生活での健康についても、妻の妊娠前と比べて責任感を向上させていることである。

・彼の上司が、さらに父親になるっていうことで、全然他人に対しての接し方も変わったし、ひと回り大きくなったなっていうことを私に言ってます。

・ちょっと仕事はもうちょっとテキパキせなあかんかなと。

・タバコやめました。これからの責任があるさかい。

・車乗ってても、変な運転しとったらムカってするの、子どもできたし、ここ最近では。

〈継続する育児への構え〉は、夫が自分自身の行動を振り返り、育児は長期的であり、それへの備えの気持ちが出ることである。

・行動自体は別に何も生まれたからとか、おなかにいるとか、そんなんはないし。別にそんなには変わってない。

・今だけ(積極的に助けをして)変わってもっていうのはあるんでね(ずっと続くから)。

4) 【父親像の行動化】

【父親像の行動化】は〈出産への立ち会い〉によって〈妻への身体的精神的サポート〉を行い、父親としての気持ちを実行に移すことである。

〈出産への立ち会い〉は、夫が出産に立ち会うことに積極的な気持ち、立ち会うことから医療者への考えをもてたり、妻へのサポートができることである。

・口ではいやいやいやと言ってるんですけど、やっぱり(立ち会いが)あればやらんといけないなとは思ってます。

・立ち会いたいという思いが強いですね。

・僕からしてみれば(妻のお産が)初めてなんで、常に(陣痛中に)時間がたてば、どういう途中経過でも知りたかった。

〈妻への身体的精神的サポート〉は、夫が出産に立ち会い時、妻を励ましたり、陣痛発作時にマッサージしたり、助産師の指示を妻に伝えるなど妻の出産を補助することである。

・せっかくここまでがんばったんやから、がんばってみいひんかって言ったらがんばるって。

・(分娩室にて)がんばろうな。:(分娩台のそばで、妻の手を握ったり、髪を撫でている)

・鼻から吸うんやで。声にせんとフーとするねんで。(一緒に呼吸法をしている)

・ウンって短く切ってしもたらええんとちがうか。(助産師の指示をよく聞き、それを妻に伝えている)

5) 【父母の違いを認める】

【父母の違いを認める】は、つわり体験の実感のなさなど〈体感できない自己の限界〉と、〈妻の母親役割を認める〉〈自分の父親役割を認める〉で構成された。

〈体感できない自己の限界〉は、夫が妻のつわりや分娩の痛みに対して、体験としての実感がないことを表現した。

・(つわりが)分からないですからね、こっちは。どんなにしんどいかっていうのは。

・(陣痛のしんどさに対して)なんともならないですからね、こればかりは。

・何やったらええんか分からへんっていうかね。(出産時)それ以上何もできひんかった。

〈妻の母親役割を認める〉

夫は出産を終えた妻に対して感謝・ねぎらいの感情を示し、児への妻の対応に尊敬の念を抱くことで、妻の母親としての役割を認めることである。

・ようがんばったなっていうようなことですよね。

・こうスッと赤ちゃん扱ってるし、うまいもんやなって。すごいなっていう、尊敬の念ですよ。

〈自分の父親役割を認める〉

夫は立ち会いに対して、「良かった」、これまでの行動に「精一杯」「後悔はない」と言い、自分の父親としての役割を認めていた。

・立ち会いして良かったと。

・今となっては、結構自分なりには精一杯してると思うんですけど。

・僕はあれで良かったと思うね。後悔は別にないね。

6) 【父親役割行動の具体化】

【父親役割行動の具体化】は、夫が〈無事の誕生への安堵〉から〈父親としての実感〉をもち、実際に産後には〈育児への積極性〉を示して、父親としての役割を実行したことを指す。

〈無事の誕生への安堵〉

子どもが無事に誕生して安心した気持ちを指す。

・最初にこうちょっとお父さんって言って抱かせて頂いたんは、やっぱりすごい印象深いです。

・思ったよりもあったかかった。こんなにぬくひんかって思って。

〈父親としての実感〉

夫は、父親としての自覚を感じ始めたことを指す。

・父親になったんやなっていう実感はまだもう少しとしたら。こう僕がお風呂入れたり、下の世話したったりでなってくると、ぐーっと出てくるんかも分からないですけど。

・今はその芽生えみたいなもんやと思うんですよ。

〈育児への積極性〉

夫は児を入浴させたり、オムツ替えをすることを通して、育児方針を模索しながら、育児に積極的になっていた。また、家事についても、休日などできる範囲で積極的に行っていた。

・お風呂、僕がずっと入れてる。

・(オムツ替え)苦痛ではないし、別に。結構楽しい感じかな。

・男の子っていう意識があるから、やっぱりしつけとか云々とか、そういう風に考えてるから。教育は

の情報の窓口となっていた。夫婦間のコミュニケーションがよく、体験を共有すると、父性意識は発達しやすいと考えられる。

次に第3段階は、【父親像の形成】であった。〈父親としての責任感の向上〉と〈継続する育児への構え〉で構成された。この第3段階は父親になる心の準備期と考えられ、【父親行動の具体化】に至るには欠かせない重要な段階であると考えられる。

第3段階の【父親像の形成】に至るパターンは、【父親としての気持ちの出発】から【夫婦としての体験共有】を経路する場合と、【父親としての気持ちの出発】からそのまま【父親像の形成】に至る場合があった。父親の自我の特性が「養護的特性」や「他者肯定的構え」である場合には親役割への適応がよく⁵⁾、また父親の「親の人格的発達」は「胎児の存在」「胎児へのかかわり行動」と関連しているという報告⁶⁾があり、【夫婦としての体験共有】がなくても父親像の形成に至れるケースは、妻にリードされなくても父親としての役割、親意識が高くなれる夫と考えられる。

2)【父母の相違を認める】段階を経て、父親役割獲得を志向

第4段階として、夫は〈出産への立ち会い〉、〈妻への身体的精神的サポート〉を行い、【父親像の行動化】を起こしていた。本研究参加者の夫は3人とも分娩に立ち会っており、そのような行動化ができたからこそ、妻に対するねぎらい・尊敬という〈妻の母親役割を認める〉ことができ、また、立ち会い中の自分自身を肯定し、〈自分の父親役割を認める〉ことができたと考えられる。一方で、分娩自体は自分が肩代わりすることができないので、夫は〈実感できない自己の限界〉や〈立ち会い中の自己の限界〉という認識になると推測できた。

【父親像の行動化】によって、それぞれの親役割を確認でき、第5段階の【父母の相違を認める】段階に至ったと考えられる。【父母の相違を認める】段階は、父親役割獲得に向かう入口と考えられ、それぞれの親役割を認め、【父母の相違を認める】ことによって、

夫は父親役割獲得に向かうことができていると考えられる。

3) 最終段階としての【父親役割行動の具体化】

夫は〈無事の誕生への安堵〉を感じている。温かい児を抱き、その重みを初めて感じることによって、父親としての実感がより深まるのではないかと考えられる。また本研究では、夫は父親としての実感について「芽生え」と表現し、今後の育児を通じてより明確になると考えていた。父性意識は父親として子どもに関わることの中で発達し、強められる⁷⁾ことから、〈父親としての実感〉は妊娠期に芽生え始め、児の出生後もより一層発展していくものと考えられる。

産後、夫は児を入浴させたり、オムツ替えをすることを通して、育児方針を模索するなど〈育児への積極性〉を示す【父親としての役割行動の具体化】の段階に至る。光田ら⁸⁾が、産褥5～7日目の父親は、それまでの低かった育児意識を子どもの誕生とともに変化させ、育児に参加しなければならないと義務を認識する。しかし、その具体的な方略が分からず悩んでいると報告しているように、この時期までに父親役割獲得がどのように行われているかによって、父親役割行動を育児行動として現す方法が異なるのではないと思われる。

【父親としての役割行動の具体化】は周産期における父親役割獲得プロセスの最終段階である。この最終段階が育児期のスタート地点に位置し、今後の子どもの継続する育児によって、父親役割行動は様々に変化・発達すると考えられる。

VII. おわりに

本研究の結果を踏まえて、周産期における夫の感情を理解し夫の父親としての準備状況を評価できるので、父親へのアプローチがしやすくなると考えられる。今後はさらに父親が役割行動を獲得しやすい助産師の関わりを検討していきたい。

VIII. 本研究の限界

本研究は、研究参加者を両親学級参加者から選定したため、もともと仲の良い夫婦の結果であることと、研究参加者が3組であることにより限定される。夫婦関係の不良や、望まれない妊娠をした場合は、今回明らかとなったプロセスには当てはまらない可能性があることが本研究の限界である。

謝 辞

本研究を進めるにあたり、インタビューに応じてくださいました御夫婦のご協力、ならびに野洲病院産婦人科のスタッフの皆様
の励ましや御助言に厚く御礼申し上げます。

〔 受付 '05. 6. 3 〕
〔 採用 '06. 5. 12 〕

文 献

- 1) 村上由希子, 内山 忍, 川越展美, 他: 妻の妊娠期におけ

- る父性性(第1報)—父性性を構成する要因—, 母性衛生, 36 (2): 256, 1995
- 2) 小林益江: 妻の妊娠期からの父親準備—胎児画像・胎動とジェンダーの特性—, 母性衛生, 43(2): 274—282, 2002
- 3) 岡美由紀, 加賀絵里子, 寺井達江: 超音波による対自画像が母親・父親に与える影響についての検討, 第23回母性看護, 8—10, 1997
- 4) 小野寺敦子, 青木紀久代, 小山真弓: 父親になる意識の形成過程, 発達心理学研究, 9 (2): 125, 1998
- 5) 神崎光子: 妊娠後期における夫の親役割への適応に関する研究(第1報)—親としての態度・行動的変化と親意識, 妻との関係性, 子どもへの感情および自我状態との関連—, 母性衛生, 45 (4): 540—549, 2005
- 6) 佐々木くみ子: 親となることによる人格的発達に関する研究—第1子妊娠期の父母について—, 母性衛生, 46(1): 62—67, 2005
- 7) 新道幸恵, 和田サヨ子: 母性の心理社会的側面と看護ケア, 125, 医学書院, 1990
- 8) 光田咲子, 村上明美: 初めての子どもを持つ父親の育児観, 母性衛生, 43 (3): 67—72, 2002
- 9) 佐々木睦子, 猪下 光: 妊娠期から産褥期における母親の感情の変化—胎児感情・対夫感情の推移—, 香川医科大学看護学雑誌, 7 (1): 101—108, 2003
- 10) 青野真歩, 高木恭子, 笹川 泉, 他: 分娩立ち会いが立ち会う夫の感情に及ぼす影響—立ち会い群と非立ち会い群の比較—, 母性衛生, 45 (4): 530—539, 2005

Father's role acquisition process in the perinatal period

Ikue Kigoshi¹⁾, Yuko Tomari²⁾

¹⁾Yasu Hospital

²⁾Gifu College of Nursing

Key words: Perinatal period, Father role acquisition, Father image

We evaluated husband's feelings during the perinatal period, and clarified the process of the development of his awareness of paternity and acquisition of father's roles. The subjects were 3 couples (primiparas and their husbands) who attended parents' classes. Interviews and participant observation were performed from the pregnancy period to the postpartum period.

From obtained statements, 7 categories were extracted. The process of the acquisition of father's roles by the husbands consisted of the following 6 steps based on [consideration to the wife]: [start of feelings as a father], [sharing of experience as a couple], [formation of an image of the father], [translation of the image of the father into action], [recognition of differences between the father and mother], and [materialization of the father's roles of behavior]. The last step of the process [materialization of the father's roles of behavior] was situated at the starting point of the childcare period. By the childcare which the child will continue in future too, the father's role behavior variously changes and seems to develop.

The father's role acquisition process clarified in this study may facilitate the assessment of husband's preparation state as a father.